『CEL』を振り返る……第6回

「語りベシアター」の展開
――地域価値を発信する文化芸術の実験劇場

栗本智代
Kurimoto Tomoyo

**『CEL』は、特集テーマについて詳しく伝えると同時に、
各研究員の活動内容を発信する貴重な媒体でもある。
研究員にとっては、掲載が目標となり研鑽のチャンスでもあった。
それが、研究所が発行する情報誌のもうひとつの役割であろう。
本稿では、地域の歴史や魅力をショートストーリーに編集し、
語りと映像に音楽の生演奏をまじえた独自の手法で伝える
「語りベシアター」の取り組みに焦点を当て、
過去の『CEL』での掲載や今号特集テーマと照らし合わせて、
活動の拡がりや意義をあらためて紹介する。**

関西、特に大阪には豊穣な歴史や文化があるが、かなりの記憶が埋もれ忘れ去られている。そんな地域の資源を掘り起こし、楽しくわかりやすく伝えようと立ち上げたのが「語りベシアター」の活動である。地域の人々にわがまちの歴史と現在のつながりを知ってもらい、誇りを持ってほしい。地域の活力や都市魅力の創出に向け活用してほしい。このように考え、取り組みを続けている。

旗揚げは仮設小屋のこけら落とし

「語りべになって大阪の歴史や文化を掘り起こしてみませんか」

1994年5月、大阪市天王寺区の生花卸売市場跡の仮設小屋「一心寺シアター」[*1]のこけら落としを兼ねて「なにわの語りべ養成講座旗揚げ公演」を開催した。〝語り〟とスライドにピアノの生演奏を交え「曽根崎心中」と「梅田」の関連を紹介すると、大入りの客席から大きな拍手が沸き起こり「歴史や文化は難しいと思っていたが、とても楽しく学べた」と好評をいただいた。半年後、大阪市主催生涯学習フェスティバルの一環で大阪市中央公会堂大集会室でも発表した後、市内の市民学習センターで養成講座を開催した(☆1)。この頃、大阪では経済最優先の風潮があったが、地域をテーマにしたイベントや講座には多くの人が集まった。

1996年3月、天王寺区下寺町一帯を舞台に「なにわ人形芝居フェスティバル」が開催された。昔は寺院の境内では、〝人形劇〟や〝紙芝居〟がよく上演されており、身近にあった文化や芸能に焦点を当て、寺院のあり方を問い、住民のコミュニティ創出を試みる催しであった。結果、ふだんは閑散とした界隈や境内が大勢の家族で賑わった(☆2)。このイベントの一環で、再び一心寺シアターで「一心寺」や「大阪の交通」をテーマに公演を開催し盛況であった。

地域とともに自己を発見する――地域への関心の高まり

『CEL』35号(1995年12月発行)では、「〝自分探し〟へのサポートシステム――『なにわの語りべ養成講座』に見る手法」を執筆。地域の物語を発掘し伝えるワークについて、地域とともに自己発見ができ、人との出会いや交流の「場」を実現する可能性があると記した。これは後の活動展開全般で実感していくことになる。

2007年、観光立国推進基本法が施行された。「地域が一丸となって個性あふれる観光地域を作り上げ、その魅力を自ら積極的に発信していくことで、住民にとって誇りと愛着の持てる、活気にあふれた地域社会を築いていくこと」を目指した取り組みを奨励するものである。大阪でもようやく文化資源の活用が着目されはじめ、翌年以降、産官による協議会事業として「まち歩き」観光プログラム[*2]が本格稼働し、大阪商工会議所主催で「大阪検定」[*3]も開始された。この時期は、団塊の世代が還暦を迎える頃でもあり、アクティブなシニア層を中心に地域への関心をより高める契機となった。

2016年の尼崎市市政100周年記念事業における「わがまち尼崎ものがたり」のステージ。映し出されたのは「義経千本桜」にも登場し、尼崎ともゆかりの深い平知盛最期の場面。写真提供/筆者(以下すべて)

「語りベシアター」は、時代の風に乗って、各新聞社との共催で、劇場での公演開催を実現させた。自治体や民間団体の記念事業での上演を依頼されることも増え、さらに活動場所を大阪から阪神間に広げ、その際、活動の総称を「語りベシアター」と改称した(☆3)。

お客さまからは「自分のまちが好きになった」「あらためて歩きたい」「歴史、音楽、伝統芸能まで、さまざまなジャンルが融合され、地域の魅力発信の理想の形のひとつだ」と喜びの感想をいただいた。

プレゼンテーションのコラボカ

「語りベシアター」の柱となるのは、地域の資源を掘り起こし、編集した物語であるが、一方で「語りと映像、音楽のコラボレーションが素晴らしい」という感想を毎回いただく。確かに当初から、音楽の生演奏や朗読劇など演出を交えたオリジナルの形式を大事にしてきた。またコアメンバーとして共演する音楽家たちが、プロとしての技術を加速度的に磨き、毎回一緒に新しい表現を試行した。

演出家や役者とタッグを組むことにも挑戦した。映写するイラストも、作品テーマのイメージに合う作家を探し出し、作画してもらっている。おのおのの芸術活動で洗練されたものを、まちの物語を伝える手法として活用していることが、ひとつの成功の鍵であり、文化芸術が異なる分野に橋をかけ、社会につながりを創るツールとなった好例だと言えるだろう。

地域との事業連携の強み

2016年には、尼崎市市政100周年記念事業として、「わがまち尼崎ものがたり――アマにしかない歴史と技術と都市文化」を上演した。尼崎市から依頼され1年かけて地元の調査取材を進め、私立園田学園中学校・高等学校のコーラス部の皆さんにも入っていただいた。

2017年には、大阪市御堂筋完成80周年記念事業の一環で「御堂筋ものがたり」を上演。2019年には、在シンガポール日本国大使館ジャパン・クリエイティブ・センター(JCC)の設立10周年事業の一環で、日本の伝統芸能「文楽」を切り口に、その魅力や見どころ、生まれた時代背景などを「語りベシアター」の公演手法を活用して紹介した(☆4)。

2022年からは、「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」[*4]という、日本最大と言われる建築イベントとの連携を試み、2023年、24年は、建築家・安井武雄[*5]を切り口にした作品を制作上演した(☆5)。特に24年は、安井武雄が設計した「大阪倶楽部」(現建築)と安井建築設計事務所100周年[*6]記念イベントとして企画し、大盛会となった。

2024年の「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」の一環として、建築家・安井武雄をテーマに、役者を起用して上演した大阪倶楽部（現建築）での「語りベシアター」より。

このように自治体や地域の事業と連携した公演活動では、地域魅力創出やまちづくりに資するものとして情報共有や発信の範囲が拡がり、地域価値、地域ブランド向上に寄与できる有効なチャンスとなった。「語りベシアター」による発信が、分野や国内外を問わず受け入れられることも実証できた。

担い手の育成から新たな「場」づくりを目指して

一方で、活動の裾野を広げ、持続可能な体制を模索するため、担い手の育成を目的としたワークショップを2013年に立ち上げた。参加者は50～70代が中心で、修了生のチームによる発表会を開催してきた。

当初数年間は、小さなセミナールームで発表会を開催したが、驚いたことに、準備が進むにつれ発表者がどんどん本気になり、本番ではテーマに合う衣装を着用して、若返って見えるほど活き活きしていた。そのエネルギーはお客さまを笑顔にし、新たな参加希望者も出てきた。また公演後、チームメンバーに各地域の公民館や図書館での発表依頼が複数あり、少しずつだが裾野が広がっていった（☆6）。

メンバーにとっては、チームの仲間たちと刺激と達成感を共有できることが参加継続の理由ではないだろうか。地域のことを学び、いかに伝えるか知恵を絞るプロセス、地域魅力を発信する役割を担い、お客さまに喜んでもらった発表の「場」の高揚感など、新しいものを創り上げ披露する愉しみは、文化芸術活動の醍醐味である。地域貢献と同時に生涯学習として、また新たなサードプレイスを開拓するという意味も生まれる。「自分も地域を見直して勉強したい」と思われるお客さまも多く、「場」を共有する人のウェルビーイングを促進し、それが地域に浸透していくことも期待して続けている。

コロナ禍で問われた、存在意義

2020年から始まったコロナ禍では継続者がかなり減ったが、幸い2021年に大阪市立総合生涯学習センター主催事業のなかで語りベシアターの体験講座を開講することができ、修了生から新たなチームが複数生まれた。以降毎年1回、発表会を同センターで開催している。

『CEL』127号（2021年3月発行）では、特にコロナ禍で問われた、文化芸術の意義や価値をテーマに「未来を創る――新しい文化芸術のかたち」として特集した。そのなかで、京都大学こころの未来研究院教授（当時）の内田由紀子氏は、芸術を通した集団内での互いの共感や助け合い、感動の分かち合いは私たちの「こころ」が欲してきたものだとし、「こころ」と「こころ」を結びつける機能を有すると記している。文化芸術はコロナ禍だからこそ必要とされた側面もあり、オンライン配信による表現発信の激増がそれを裏付けている。同時期「語りベシアター」でもオンラインに特化した制作発信を行った（☆7）。

上／体験講座修了生による公演の様子。左／文化芸術の存在意義と価値をテーマにした『CEL』127号。

小学生による制作発表サポート

2024年12月、大阪市大正区にある市立中泉尾（なかいずお）小学校の100周年記念式典にて、6年生が中泉尾地域の魅力を「語りベシアター」の手法を活用して発表した。

その2年前、当時の校長から依頼を受けて以降、担当教員と下準備を進めた後、当時5年生の全31名が1年かけて作品を制作発表する指導サポートに当たった。

「知るほどファンに、中泉尾――われらの母校中泉尾小の校歌について」と題して、校歌の歌詞から、水の都、渡し船、機械、工場、花、大正区などをキーワードに、歴史からまちづくりまで、クイズや寸劇、器楽演奏を入れながら、6年生らしい作品を完成させた。

最初は興味を示さない児童もいたが、話し合いや練習を繰り返した結果「みんな完璧だった。精一杯発表できた」「楽しかった」「拍手をもらって嬉しかった」と達成感が感じられる感想が並んだ。来賓の方々は、「素晴らしい発表だった」「地域や学校の誇りを再確認できた」「次の世代に伝えていきたい」と感動していた。

準備のなかで「このまちが好きになった」という言葉が児童から出てきてタイトルにつながった。彼らにとって、それまで関心がなかった学校周辺のまちについて知る機会となり、見方が少し変わったのは確かだろう。この経験がこれからの生活やまちづくりに、いつか何らかの形で反映されることを願っている。

2024年の大阪市立中泉尾小学校100周年記念式典にて、「語りベシアター」の手法で行われた発表会の様子。

過去の『CEL』に掲載された関連記事（☆1～7は本文中の☆と対応）

★1	30号～35号（1994～1995年）	「なにわの語りべ養成講座」（大阪にまつわる物語を短編十二話）
★2	38号（1996年）	「大阪、下寺町の挑戦――なにわ人形劇フェスティバル'96を通して」
★3	110号（2015年）	「『語りベシアター』の展開と可能性――地域の魅力発信と新たな担い手の育成」
★4	124号（2020年）	「語りベシアター シンガポール公演報告――文楽を通して、大阪・上方の歴史と文化を紹介」
★5	134号（2024年）	「語りベシアター2023　ガスビルを設計した建築家・安井武雄――公演開催報告と制作裏話」
★6	122号（2019年）	「語りべ活動の第二フェーズ――語りベシアターチャレンジ公演2019」
★7	131号（2022年）	「語りベシアター『大阪御堂筋ものがたり』――オンライン配信に向けた作品制作と活用の可能性」

新たな地域価値の創出に向けて

今号の特集の取材を通じて、文化芸術の無限の可能性をあらためて感じた。『CEL』135号（2024年9月発行）「場づくりのその先へ――つながりから社会を変えていく」でも論じられた〝集い〟や〝つながり〟を生じさせる媒介として、またそこから生じる地域や社会での活動そのものとしても文化芸術を捉えることができる。

本特集で話を伺った吉本光宏氏によると、文化芸術の価値は、「未知のものを生み出す」力を基盤とし、その表現を通して「異なる分野をつなぐ」、「気づきを与える」、そして触れた人に「次の行動を起こさせる」力である。これらは「語りベシアター」も地域において、まさに意識してきた価値であり、今後も新たなつながりや活動が創出される可能性を追って、実践を続けていきたい。

注

＊1　後にリニューアルされ現在は「一心寺シアター倶楽」と改称し、文化・芸能・地域社会への貢献を目的に貸し館として活用されている。

＊2　現在は、一般社団法人「大阪あそ歩」として継続している。

＊3　2009年度から2022年度まで実施。

＊4　「大阪市生きた建築ミュージアム事業」の一環として2014年度に始まり、現在は一般社団法人生きた建築ミュージアム大阪が運営する、従来の文化財としての建築の価値とは異なる建築の新しい価値を発信する建築公開イベント。

＊5　1884～1955年。建築家。大阪を中心に活躍し、「大阪ガスビルディング」をはじめ昭和初期のモダニズム建築を代表する名建築を多数設計した。

＊6　1924年「大阪倶楽部」（現建築）の建設後、安井武雄は独立し、同年に安井武雄建築事務所（現在の安井建築設計事務所）を立ち上げた。